

実践化・生活の自立につながる住まいの学習

－「教えて」「考えさせて」「表現させる」授業を通して－

本校では「学習しつづける力を高めるための研究」をテーマに、かかわり合いを土台として「教えて考えさせて表現させる授業」を積み重ね、生徒の表現活動を大切にしながら、テーマに迫るための授業の在り方について研究を続けてきた。その流れを受け、家庭科における「教えて考えさせて表現させる授業」の在り方はどうあればいいかを考え、『家族と共に住もう』を題材に、授業の核心をどう絞り込み、段階的に何をどこで指導するか（教えて）、どんな見方で考えさせどう視野を広げるか（考えさせて）、学んだことの価値や実感をどう表現させるか（表現させる）について実践研究した。

1. はじめに

本題材は、住居が家族の生活におおいにかかわりをもっていることに気づかせ、ちょっとした工夫で家族とのかかわりや安らぎのある場所が変わるということを学ばせ、これからの生活を展望しながら、課題をもって住生活をよりよくしていこうとする能力と態度を育てることをねらいとしている。中学生という心の揺れる時期に、家族とのコミュニケーションを図ることと、自らの自立（プライバシーの確保）をテーマに住まいを考えてみることは、必要なことだと考える。

2. 本時の目標

住まいの空間の使い方について、家族構成や年齢・家族の願い・生活の仕方を考え、家族にふさわしい住まいの空間の工夫ができる。

3. 「教えて考えさせて表現させる授業」について

住まいの空間の役割や特徴を理解させた上で、家族構成や年齢・家族の願い・生活の仕方に応じた住まい方について工夫させたいと考えている。自己中心的な考えをもちやすい生徒たちの見方を、個人としての視点から家族という視点へと広げながら、住まいと家族のかかわりについて考えさせるために、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動を主に、以下のように構想した。

また、授業で目指す生徒の姿を明確にするために、自己評価活動での生徒記述例を明記した。

研究のポイント	本時の構想（生徒の活動）
○教えて 段階的に、何をどこで指導するのか	【説明する】 ・住まいの空間の役割を知る。 ・事前調査の結果からみんなが考える部屋選びのポイントを整理し、モデル住居を例として説明する。
○考えさせて どんな「見方」で考えさせ、どう視野を広げさせるのか	【理解の確認】 ・自分の部屋選びという視点から主観的にモデル住居の中の居場所を考え、部屋選びのポイントをもとに説明する。 【理解深化課題】 ・立場を変え、自分以外の視点から家族の居場所について考え、説明する。
○表現させる 既習の「よりどころ」を選択し、価値をどう表現させるのか	【自己評価活動】 ・家族の住まい方について学んだこと、感じたことをまとめる。 *生徒記述例* ・住まい方を考えるときは、部屋の構造だけでなく、「家族構成」「家族の願い」「生活の仕方」なども考えていけばよいことがわかった。 ・家族全員が居心地のよい住まい方をするためには、家族で話し合ったり、お互いを思いやったりすることが必要であることがわかった。

4. 授業場面から

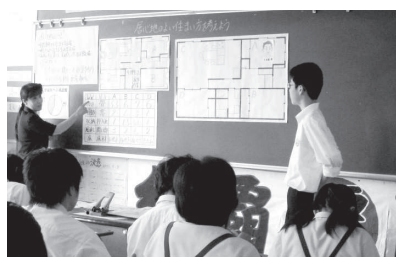
(1) 「説明する」の場面

前時の学習事項（住まいのはたらき）の確認を行った上で、生活行為と住まいの空間とのかかわり、事前調査からわかった生徒が考えている部屋選びのポイン

トに沿った住まいの見方を教えた。生徒は、自分の居場所を考える際のポイントとして「広さ」や「風通し」という視点はもっていたが、具体的な検証方法までは考えが至っていなかった。そこで、「畳の枚数」や「開口部の数」を見ればよいという『見方』について教えたのである（*板書左側参照）。

(2)「理解の確認」の場面

モデル住居の中から個人の空間として使いたい部屋をポイントに沿って考えさせた。発表では、選んだ理由を具体的に説明させることで、空間のはたらきやそれぞれの空間の特徴について生徒が理解しているかどうか確認した。



選んだ理由について説明

(3)「理解深化課題」の場面

①『親の立場』から親子の住まい方を考えさせる。

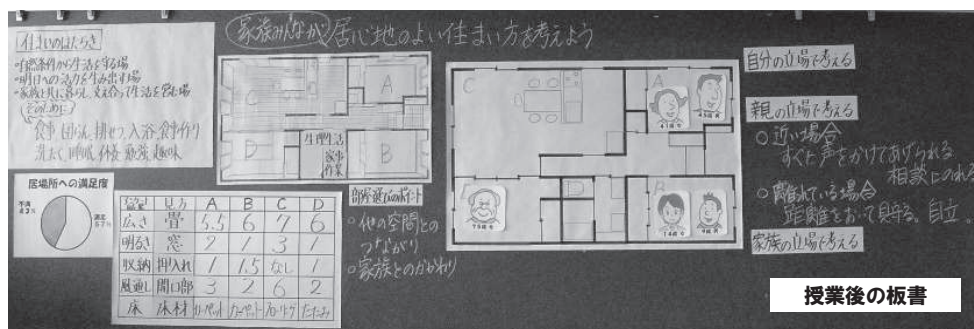
子の居場所を指定し、自分が親だったらどこの部屋を居場所にするか考えさせた。親子が接している場合と離れている場合に分けて理由を整理していく中で、生徒は、住まい方には家族の願いが込められていることに気づいていった。

②『家族それぞれの立場』から住まい方を考えさせる。

モデル家族を与え、グループごとに家族一人ひとりの立場や願いを考えながら家族の居場所を考えさせた。グループ内で意見交



グループでの話し合い



授業後の板書

換することで、立場によって考え方は違ってくることに気づき、家族みんなが居心地の良い配置を考えるということは家族関係にもかかわってくるのだと気づく生徒が多かった。また、他グループの発表を聞く場面では、同じ家族でも住まい方は一定ではないことなどを知り、それぞれの住まい方に込められた家族の願いがあることを知るいい場面となった（*板書右側参照）。

(4)「自己評価活動」の場面

思考が広がった実感や学んだことの価値について自分なりのことばで表現させた。生徒は板書の中のキーワードを拾ったり、話し合いで深まった考えを書いたりして自己評価をまとめていた（*挙手により数名発表）。

5. おわりに

生徒の中には、家庭科の学習内容を『わかったつもり』でいる生徒が多い。「説明する」「理解の確認」「理解深化課題」という学習過程を通して、『わかったつもり』から『わかった』に変わったことが「自己評価活動」の中から読み取れた。また、自分個人から家族という視点へと見方を広げながら、住まいという側面から家族のあり方を考えさせたり、家族と自分とのかかわりを意識しながら家族としての住まい方について実感したりしたことは、実践化・生活の自立につながると考えられる。今後は、他の題材での実践も重ね、指導の充実を図っていきたい。

参考文献・参考Webページなど

- ・市川伸一（2008.6）『「教えて考えさせる」授業を創る 基礎・基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業設計』図書文化社
- ・盛岡市立上田中学校『平成21年度研究収録』